

[特集]

横浜市新市庁舎完成記念

近代横浜を掘る 洲干島からひろがる都市のすがた

[展示余話]

「記念きっぷ」で旅する日本の観光風景 (図版ダイジェスト)

[資料紹介]

聖母愛児園・ファチマの聖母少年の町 記録写真

横浜都市発展記念館

ハマ発 NEWSLETTER 第33号 2020(令和2)年1月18日発行(年2回発行・不定期)
編集/横浜都市発展記念館 発行/公益財団法人横浜ふるさと歴史財団 〒231-0021 横浜市中区日本大通12 TEL. 045(663)2424 FAX. 045(663)2453
題字/高橋健介 印刷/聖本/株式会社佐藤印刷所 本誌からの無断転載を禁止します。

EXHIBITION

企画展のご案内



近代横浜を掘る

洲干島からひろがる都市のすがた

2020(令和2)年春に完成する横浜市新市庁舎の建設地は、江戸時代から続く洲干弁天社の社地にあたります。建設に先立っておこなわれた埋蔵文化財(洲干島遺跡)の発掘調査では、開港期の石積み護岸や関東大震災で倒壊した建物基礎などの遺構が発見されました。この企画展では、新市庁舎の建設地である北仲通南地区を中心に、開港から震災復興までの都市横浜のすがたを発掘調査の成果をもとに紹介します。

【会期】2020(令和2)年1月18日(土)～4月12日(日)

【図録】近代横浜を掘る 横浜都市発展記念館/編

寄贈・寄託資料の紹介

令和元年7月から11月までに受贈した資料です。(敬称略)

寄贈資料名	点数	寄贈者
山手警防団第三、第五分団団旗	5	山手消防団長 豊島世志男



●表紙図版
調査中の洲干島遺跡
2015(平成27)年

MUSEUM SHOP

ミュージアム・ショップより

刊行物

- ①『一枚の切符から昭和のあの頃へ 思い出す横浜のイベント、ニッポンの風景』
横浜都市発展記念館/編 定価1,000円+税
- ②『奥村泰宏・常盤とよ子写真展 戦後横浜に生きる』
横浜都市発展記念館/編 定価1,300円+税
- ③『伸びる鉄道、広がる道路 横浜をめぐる交通網』
横浜都市発展記念館/編 定価1,500円+税
- 『目で見える「都市横浜」のあゆみ』
横浜都市発展記念館/編 定価1,239円+税

DVD

- 『映像でたどる昭和の横浜』シリーズ
定価各1,429円+税
- 第1巻・港とまちづくり
- 第2巻・都市の交通
- 第3巻・子どもたち



横浜都市発展記念館 利用案内

■開館時間

午前9時30分～午後5時
2020.3/14は午後7時まで
(券売は閉館30分前まで)

■休館日

毎週月曜日・年末年始ほか
(月曜日が祝日の場合は開館、翌平日に休館します。)

■観覧料

上記企画展開催期間

企画展 一般300円 小・中学生150円
(企画展の入館券で常設展もご覧いただけます。)

常設展のみ 一般200円 小・中学生100円

それ以外の期間

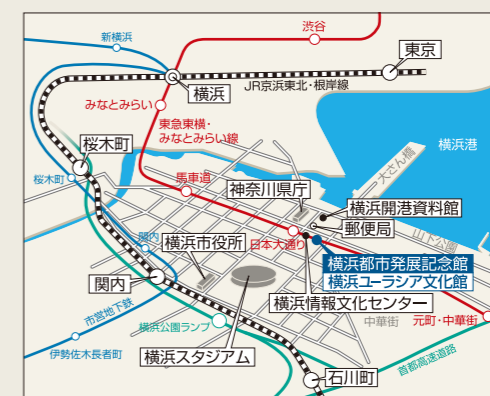
常設展のみ 一般200円 小・中学生100円

●毎週土曜日は小・中・高校生無料

●「濱ともカード」「障害者手帳」「愛の手帳(療育手帳)」
などをお持ちの方は、無料です。

■ホームページ

<http://www.tohatsu.city.yokohama.jp/>



交通アクセス

- 東急東横・みなとみらい線日本大通り駅(3番出口)0分
- 横浜市営地下鉄関内駅(1番出口)から徒歩約10分
- J R 京浜東北・根岸線関内駅(南口)から徒歩約10分
- 横浜市営バス「日本大通り駅東前」下車徒歩1分
- あかいくつバス「日本大通り」下車徒歩1分

※本誌は当館ホームページでも
ご覧いただけます。



編集後記
明けておめでとうございます。今回は、市庁舎の移転を記念した企画展を特集に取り上げました。都市において市庁舎のある場所は、行政・産業・交通などの点で、非常に重要な意味を持っています。それを改めて考えてみるきっかけになれば幸いです。(岡)

◎次号発行予定 令和2年7月頃

横浜市新市庁舎完成記念

近代横浜を掘る 洲千島からひろがる都市のすがた

② 調査風景 2015(平成27)年
横浜市ふるさと歴史財団埋蔵文化財センター提供

2019(令和元年)12月現在、中区の北仲通南地区では、横浜市の新しい市庁舎の建設が進んでいる。2020(令和2)年6月末の供用開始が予定されている新市庁舎の建設地では、工事に先立って発掘調査がおこなわれ、開港以降、この地に建てられた建物や都市インフラの遺構が数多く発見された。

洲千島遺跡の発掘

発掘調査は、2015(平成27)年8月から翌年3月にかけて、横浜市ふるさと歴史財団埋蔵文化財センターによっておこなわれた①②。遺跡は洲千島と呼ばれる砂洲の先端に位置し、江戸時代から続く洲千弁天社の社地にあたることから、洲千島遺跡と命名された。開港場の整備とともに埋め立てによって急速に市街地化が進んだ場所であり、近代横浜の都市形成をその原点から観察することができる遺跡といえよう。

発掘調査の結果、調査区の北側では1863(文久3)年頃の築造とみられる大岡川の石積み護岸や、国内の灯台事業を所管する部署として北仲通に設置さ

れた航路標識管理所(旧灯台寮)の諸施設、その南側では本町小学校(旧横浜商法学校)の校舎、さらに本町通り沿いでは横浜銀行集会所や原合名会社アパートなど、幕末から明治・大正期にかけてのさまざまな遺構が検出された。ここでは、横浜ゆかりの建築家遠藤於菟の設計で知られる横浜銀行集会所の建物とその遺構について取り上げたい。

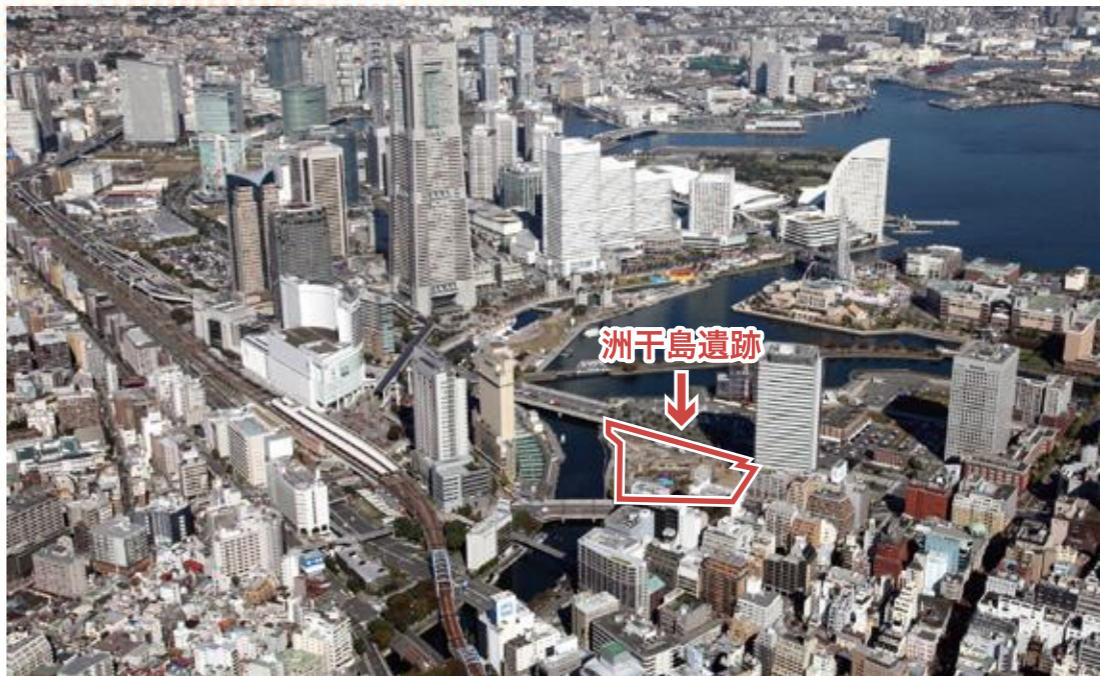
明治時代の本町通り

横浜公園から横浜港へいたる日本大通りを関内地区の縦軸とすれば、本町通りは関内地区を東西に貫く横軸である。1872(明治5)年10月、大岡川対岸の埋め立て地に横浜駅(現在の桜木町駅)が完成し、新橋―横浜間で日本最初の鉄道が開通すると、本町通りは横浜駅と横浜港を、また外国人居留地とをむすぶメインストリートとして発展していった。

③は、明治時代後期の本町6丁目を写したもので、本町通りの先には横浜駅へと通じる弁天橋が架かっている。通りの右側が発掘調査された洲千島遺跡にあ

り、手前から横浜貿易新報社、原合名会社アパート、横浜銀行集会所の3棟が写っている。

横浜貿易新報社(現在の神奈川新聞社)の社屋は、もとは横浜新報社の社屋だった建物で、同社は1922(大正11)年に大岡川沿いに新社屋を構えて移転するが、ここで関東大震災に見舞われた。その社屋の遺構も発掘調査で検出されている。その奥の煉瓦造3階建ての原合名会社アパートは、横浜を代表する貿易商原富太郎が経営する貸事務所であり、横浜商業会議所(現在の横浜商工会議所)も一時期この建物内に事務所を構えていた。この建物と奥に見える横浜銀行集会所の2棟を設計したのが、建築家遠藤於菟である。



洲千島遺跡

建築家遠藤於菟と 横浜銀行集会所

遠藤於菟(1866~1943)は、近代建築の新技術である鉄筋コンクリートを建築界に導入した先駆者として知られる。1904(明治37)年竣工の横浜正金銀行本店本館(現在の神奈川県立歴史博物館の建物)の現場監督を経て、翌年に独立した遠藤が自らの事務所の第一作として設計した建築が、本町通り沿いの横浜銀行集会所であった。

横浜銀行集会所(現在の横浜銀行協会)は、横浜の銀行業界の社交施設として1894(明治27)年4月に設立された。当初集会所は弁天通4丁目にあったが、加盟銀行の増加にともない建物が手狭になったことを受けて、1905(明治38)年12月、弁天橋際の本町6丁目84

番地へと移転した。

完成した建物は煉瓦造2階建てで、階段の踊り場にだけ部分的に鉄筋コンクリートが導入されている。のちに遠藤は、建物すべてが鉄筋コンクリートでつくられた三井物産横浜支店(現在のKN日本大通ビル)を日本大通りに完成させた。また銀行集会所のデザインは、当時ヨーロッパで流行していた新様式アール・ヌーヴォーを採用したもので、従来の重厚な装飾は影をひそめ、植物模様をあしらった平面的な装飾に彩られていた④。

しかし1923(大正12)年の関東大震災で、横浜銀行集会所は他の多くの建物と同じように、マグニチュード7.9の激震によって倒壊した。

関東大震災の傷跡

⑤手前に見える瓦礫は、震災で倒壊し

た原合名会社アパートである。その左奥に、壁だけを残して横浜銀行集会所の残骸が立っている。横浜市庁舎や開港記念横浜会館(現在の横浜市開港記念会館)のように、鉄材による補強の効果で地震に耐えた煉瓦造の建物はあったものの、煉瓦造の多くの建物は地震の揺れに耐えきれず、関東大震災で大きな被害を受けた。

洲千島遺跡の発掘調査では、倒壊した横浜銀行集会所の煉瓦基礎が検出された⑥。外装材とみられる白色煉瓦が貼られた煉瓦塊も出土している。注目されるのは地下室にあたるモルタル敷きの床面で、煉瓦壁に挟まれた床面はうねるように大きく盛り上がりがあった⑦。関東大震災での揺れが激しかったかを物語っている。

検出された基礎の一部は新市庁舎の外

構部分に、そして地震で大きく隆起した地層は、地下鉄みなとみらい線馬車道駅と新市庁舎をつなぐ地下通路内に展示される予定である。

(青木 祐介)



⑦ 関東大震災で隆起した地層 2016(平成28)年
横浜市ふるさと歴史財団埋蔵文化財センター提供



③ 本町通り弁天橋付近 明治時代後期
横浜開港資料館所蔵



④ 横浜銀行集会所 『建築写真類聚 銀行会社巻二』(1917年)掲載
当館所蔵



⑤ 関東大震災で倒壊した横浜銀行集会所と原合名会社アパート
1923(大正12)年 横浜開港資料館所蔵



⑥ 銀行集会所の建物遺構 2015(平成27)年
横浜市ふるさと歴史財団埋蔵文化財センター提供

① 洲千島遺跡の位置 2015(平成27)年
横浜市ふるさと歴史財団埋蔵文化財センター提供

「記念きっぷ」で旅する 日本の観光風景

図版ダイジェスト

当館で開催した企画展「一枚の切符から昭和のあの頃へ」(2019年7月13日〜9月23日)は、「1」記念きっぷに見る都市横浜の昭和、「2」汽車・電車の切符の昭和史、「3」記念きっぷで旅する日本の観光風景、の三部構成で実施しました。そのうち「3」は全国の記念きっぷを昭和40、50年代の国鉄を中心に展示するものでしたが、展示図録には紙幅の都合により、取り上げることができませんでした。そこで本ページでは、「3」において展示したものを一部、紹介したいと思います。切符は使用後に原則として回収されるのですが、記念きっぷは記念に購入して保管されるものでした。昭和時代の後半は、各地の市電や私鉄も発行するようになりませんが、その主役となったのは国鉄(日本国有鉄道)でした。特に昭和40年代後半から記念きっぷの発行・販売、そしてその収集はブームを迎えます。

新幹線をはじめとした鉄道網の整備と余暇の充実によって、個人あるいは家族での旅行が日常化(大衆化)したことで、全国各地の観光名所やイベントを取り上げた記念きっぷの流行がそれに重なるのは偶然でないでしょう。

(岡田直)



- 1 「帝国議会議事堂竣工記念乗合自動車乗車券」
1936(昭和11)年/東京市電気局/芳賀洋子氏寄贈
現在の国会議事堂。大正時代から建設の計画が進められたが、関東大震災に見舞われるなどし、ようやく竣工した。
- 2 「オリンピック東京大会記念乗車券(電車片道乗車券)」
1964(昭和39)年/東京都交通局
オリンピックの開催地となった東京都の交通局が発行した。オリンピックのシンボルである五輪のマークを絵柄に使用している。
- 3 「祝伊豆急開通記念乗車券」
1961(昭和36)年/東京急行電鉄
東急電鉄の子会社にあたる伊豆急行が、伊東(静岡県・下田(同)間の路線を開通させ、国鉄の伊東線との乗り入れを開始した。
- 4 「箱根・駒ヶ岳ロープウェイ開通記念乗車券」
1963(昭和38)年/伊豆箱根鉄道/溝口英明氏寄贈
箱根の観光開発をめぐって、西武と小田急の両グループが対立。これは前者に属するロープウェイで、早雲山には後者の箱根ロープウェイがすでにあった。使用済み残片。
- 5 「直江津―東京間特急「あさま」号新設記念急行券」
1968(昭和43)年/日本国有鉄道
新幹線の開業以前、東京(上野駅)から長野、直江津(新潟県)まで走った特急列車に「あさま」号の名が用いられた。浅間山に由来する。
- 6 「善光寺御開帳記念急行券」
1967(昭和42)年/日本国有鉄道
「牛」に引かれて...のことわざでも知られる善光寺(長野県)は、6年に一度、御開帳がおこなわれる。
- 7 「新幹線博多開業記念特急券」
1975(昭和50)年/門司鉄道管理局
山陽新幹線の岡山・博多間が開通し、東京からのひかり号が約7時間短縮された。写真は福岡・黒田藩に由来する黒田節の像。
- 8 「太陽国体記念急行券」
1972(昭和47)年/鹿児島鉄道管理局
鹿児島県で開催された第27回国民体育大会を記念して。天皇・皇后が行幸啓した。桜島を大きく図案化している。
- 9 「関門橋開通記念入場券(下関駅)」
1973(昭和48)年/広島鉄道管理局
関門橋は、関門海峡をまたいで山口県と福岡県を結ぶ自動車専用の道路橋。一般の国道は関門トンネルで海底をくぐる。
- 10 「祝広島東洋カープ優勝記念乗車券」
1975(昭和50)年/広島電鉄
古業監督の率いる広島東洋カープは、戦後の球団創設以来初めてのリーグ優勝を果たした。「赤ヘル軍団」が流行語になった。
- 11 「万国博中央口―江坂開通記念乗車券」
1970(昭和45)年/北大阪急行電鉄
大阪万博開催の同年、市営地下鉄の御堂筋線が江坂(大阪府)まで延伸し、江坂から会場の千里(同)までは北大阪急行電鉄が開通した。両者は相互直通をおこなう。
- 12 「みなの祭記念乗車券」
1974(昭和49)年/神戸市電気局/芳賀洋子氏寄贈
神戸では戦前からみなの祭が毎年開催され、神戸まつりに発展した。これは戦前の神戸市電の記念きっぷ(使用済み残片)。
- 13 「近畿日本名古屋駅完成記念乗車券」
1967(昭和42)年/近畿日本鉄道
近畿名古屋駅は戦前に関急名古屋駅として開業。地下駅。この年に拡張・改良の工事が完成した。
- 14 「金津―東古市(永平寺線)乗車記念券」
1969(昭和44)年/京福電気鉄道
永平寺(福井県)は鎌倉時代からの禅宗の寺院。永平寺へ向かう鉄道路線が一部廃止される際、前日まで有効の記念乗車券が発行された。
- 15 「東北本線全線複線・電化完成はつかり2号特急券」
1968(昭和43)年/日本国有鉄道
青森から東京(上野駅)までの所要時間が、約2時間短縮され特急列車で約8時間半となった。1等の座席指定の特急券。
- 16 「東北夏の四大まつり記念入場券(青森駅)」
1969(昭和44)年/日本国有鉄道
東北夏の四大祭りは、仙台の七夕祭りや青森のねぶた祭り、秋田の竿燈祭り、山形の花笠祭りの四つ。
- 17 「新しい青函連絡船羊蹄丸就航記念」
1965(昭和40)年/青函船舶鉄道管理局
青森と函館を結ぶ国鉄の青函連絡船に新造船が投入され、4時間半を要した所要時間が4時間を切った。羊蹄丸は北海道の南部にある。道東の風土シリーズ急行券(樹木の摩周湖)同シリーズは他に、釧路湿原、ウトロ港、知床、厚岸、ノサップ、羅臼など、多数発行された。DISCOVER JAPANは国鉄が万博後に全国で展開したキャンペーン。

聖母愛児園・ フアチマの聖母少年の町 記録写真 宮寺信良氏(洗礼名・レイモンド)寄贈



① 聖母愛児園のシスターと子どもたち

戦後の横浜は、沖繩を除く日本全土の連合国軍地上部隊を統括する米第8軍の司令部がおかれ、数万の占領軍兵士が駐留する基地の町であった。

占領期間中、占領軍兵士と日本人女性との間に多数の子どもが生まれたが、この中には町に捨てられる子どもや、育児放棄をされて死亡する子どもも多く存在した。これらの子どもたちを保護したのが中区山手町の聖母愛児園である。

昨年度、同園と同園の分園「フアチマの聖母少年の町(ボーイズタウン)」(以下、少年の町)の卒園生代表である宮寺信良氏より、アルバム13冊分および記録写真が当館に寄贈されることになった。本稿では、二つの施設の歴史について、寄贈資料から解説をする。

聖母愛児園の歴史

聖母愛児園は、1946(昭和21)年4月に、カトリックの世界組織、マリアの宣教師フランシスコ修道会を母体と

援助のために訪れている。②は1951(昭和26)年に元ボクシング世界ヘビー級チャンピオンのジョー・ルイスが、朝鮮戦争の慰問使節団の一員として来日した際に、同園を慰問した様子を撮影した一枚であるが、このような著名人が訪れるほど、同園の存在が米軍内に広く知られていたことを示す資料であるといえよう。また、陸海軍の兵士たちが同園を訪れた際に撮影された写真も複数存在するが、このような訪問の際に気に入った子どもを養子に迎えることも頻繁にあったという。

少年の町の歴史

聖母愛児園はカトリックの厳格な規律の下で生活するシスターたちの運営する施設であったため、教養上年齢期を迎えた男児を養育することができなかった。

このため、1954(昭和29)年に、神奈川県大和市(現大和市)に同園の分園である男児専門の少年の町が建設されることになった。しかし、当時の日本では同園が保護したような子どもたちに対する偏見が根強く存在し、少年の町建設にあたって、地元では建設反対の住民運動が起こり、4千名以上もの反対署名が県に提出される事態となった。この状況の収拾に尽力したのが、カトリック横浜司教区の荒井勝三郎司教である。荒井司教は粘り強く地域住民を説得し、子どもたちを地元の小学校へ入学させないことに加え、中学校へ進学する際も横浜カトリック系の学校に入れさせることなどを条件に施設建設の承認を地

元住民から得ることに成功する。

こうして建設された少年の町は、約8千坪もの敷地内に建てられた洋風の施設であり、敷地内には農場があつて牛や馬などの家畜が育てられていたほか、のちにはプールやロデオ場も米軍の支援で設置されるなど、ゆとりのある環境が整えられていた。③は建設中の少年の町を撮影したもので、前に並んでいる子どもたちが入園第1期生である。子どもたちは、地元住民との約束で地元の学校ではなく、中区の元街小学校へ通学することになった。このため、通学のためのバス(④)が用意されていたが、往復2時間の行程は当時の道路事情もあつて子どもたちの負担であつたという。この後、1960(昭和35)年から、地元の大和市立林間小学校の転学が許可されるまでバス通学は続いた。

少年の町には最盛期には60名ほどが在籍していたが、寄贈資料者の宮寺氏は、カトリックのプラーザーたちによる宗教的指

導の下で、子どもたちや職員は通常の家族よりも強い絆で結ばれていたということを強調されている。少年の町には様々な人種の子どもたちが存在したが、肌の色で区別するようなことはなく、平等な環境であつたことも宮寺氏は証言されている。⑤は少年の町の風呂場を撮影したものであるが、年長の者が年下の体を洗うなど、お互いに助け合いながら子どもたちは生活を営んでいた。

少年の町には様々な人々が支援の手を差し伸べていた。⑥は、少年の町に近い大和教会で撮影された集合写真であるが、教会の中には子どもたちの世話をボランティアで行う人が複数存在したという。また、勉強が遅れがちな子どもたちのために放課後ボランティアで補習をする先生の姿を撮影した写真もある(⑦)。このほか、立正佼成会の女性たちが子どもたちの服を繕っている様子を撮影した写真もあり、宗派を超えた人々の協力があつたことがわかる。聖母

愛児園時代に引き続き、米軍の支援も厚く行われたが、偏見が強く存在したこの時期に、子どもたちを援助した日本人も複数存在していたことは、記憶されるべき歴史であると考えられる。

少年の町は入園者の減少や社会情勢の変化などにより、1971(昭和46)年に閉園するが、アフターケア施設「聖ヨゼフ寮」では、現在でも社会に出た卒園生の支援と連絡のために活動を継続しており、卒園生たちは定期的に横浜でOB会を開催して親交を深めている。今回寄贈された資料群は、占領期の横浜で、厳しい状況にあつた孤児たちの保護の実相を知る極めて貴重な資料群であるといえる。当館では、寄贈された写真資料の整理を関係者への聞き取り調査と並行して行い、聖母愛児園と少年の町の歴史を後世に伝えてゆくための事業を継続してゆく予定である。

(西村 健)



③ 建設中の少年の町前に立つ子どもたち



④ スクールバスで元街小学校に通う少年の町の子どもたち



⑤ 子どもたちの入浴風景



⑥ 大和教会の人々と少年の町の子どもたち



⑦ ボランティアで子どもたちを教える先生